

<参考問題>

国本女子中学校入学試験問題

国語

(試験時間・50分)

<注意事項>

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
2. 試験中に問題冊子の印刷がはっきりしないところ、ページの抜け落ち、解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせること。
3. 問題冊子表紙、および解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を書くこと。
4. 受験番号は算用数字で書くこと。
5. 答えはすべて解答用紙の決められたところに、はっきりと書くこと。

受験番号					氏名	
------	--	--	--	--	----	--

一

次の~~~~線の漢字の読みをひらがなで、カタカナは漢字で書きなさい。

- 1 返事を保留する。
- 2 お寺の境内で遊ぶ。
- 3 旅行して見聞を広める。
- 4 商いに精を出す。
- 5 国連に加盟する。
- 6 サイワイ無事だった。
- 7 イギを申し立てる。
- 8 庭は秋のフゼイだ。
- 9 ニュースにカンシンを持つ。
- 10 水がジョウハツする。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三学期もいよいよ終わりが近づいて、給食に卒業メニューが出る日がやってきた。転校までに残された時間は、もうあとわずか。けれどあたしはまだ美貴たちと、あのメッセージカードのような約束を交わすことができないでいた。

約束をしたって、それが必ず果たされるといふ確証はない。交わした約束が忘れられてしまうのは、自然と絆が消えてしまうより、きつともつと悲しい。そんなふうにかえたら怖気づいてしまつて、美貴たちに約束の話を持ちかける勇気が出せなかったのだ。

「ふうん、卒業式の日じゃないのに、卒業メニューが出るのね」

美貴が給食のトレイに載つた豪華なメニューをながめて言った。卒業メニューは毎年恒例だけど、去年まで小中一貫の私立学校に通つていた美貴は、そういうメニューがあることを知らなかったらしい。

「卒業式の日だと、卒業生は給食出ないからさ。メニューはいつも違うんだけど、このデザートはクレープだけは、なんでか毎年変わらないんだよね。まあ、おいしいから全然かまわないんだけど」

あたしは『卒業おめでとう』とビニールの包装に印刷されたクレープを美貴に見せて説明した。中学になつても給食センターは小学校のときと変わらないから、これを食べるのも、もう七度目になる。

今年の卒業メニューはそのクレープに、メンチカツとミネストローネとフルーツポンチ。どれも人気メニューで、あたしの好物ばかりだ。

いつもだったら全部おかわりするようなすばらしいメニューなのに、あたしはなかなか箸が進まなかった。卒業メニューが、お別れメニューのように思ってしまったのだ。

お別れなんてしたくない。二年後の卒業のときも、この学校で美貴たちといっしょに卒業メニューを食べていたい。そう思ったから、大好きなメニューも食べたくななくなつてしまつていた。給食を食べたくないなんて、小学校入学以来はじめてのことだった。それでも（１）食べ進めて、最後にデザートのクレープが残つた。あたしがそれに手をつけるのをためらっていると、こつ

ちを見ていた美貴と目が合った。

美貴はなにかを察したような顔をしていた。そんな美貴に、なんでもないよ、と伝えるようにほほえんでみせると、あたしはクレープに手を伸ばそうとした。

そのとき突然、美貴があたしに尋ねてきた。

「ねえ、そのクレープ、わたしに出来ない？」

あたしは目を丸くした。美貴が給食をねだることなんて、これまでなかったから。班のみんなも、えっ、というふうに美貴のことを見ていた。

べつに惜しくはなかったけど、あたしは（ C2 ）意地悪に聞きかえした。

「うーん、条件にもよるかな。これの代わりに、美貴はなにをくれるわけ？」

「なにもあげない」

美貴は平然とこたえた。その返事を聞いて、あたしはきよとんとしてしまう。

「いやいや、それはないよ。こんなレアなメニューをただでもらおうなんて、いくらなんでも虫がよすぎ……」

「ごめんなさい、言いなおすわ。いまはなにもあげない」

美貴があたしの言葉を遮った。あたしが首を傾げると、美貴はあたしの顔をまっすぐに見つめて続けた。

「でもその代わりに二年後、三年生のときの卒業メニューのデザートを、梢のところを持っていくわ。傷まないように冷凍して、週末に電車に乗って。絶対に、約束する」

美貴の眼差しは真剣だった。美貴の言葉の意味に気がついて、あたしの は震えた。

あたしが（ 3 ）望んでいた約束を、美貴はいま、交わしてくれようとしているのだ。あたしが転校したあとも、ずっと忘れずにいる。ずっと友達でいる。そういう約束を。

不安と期待が混ざりあった感情を隠して、あたしは軽い口調でたしかめた。

「そんな約束、ほんとにしちゃっていいの？ あたしの食い意地が張ってるの、美貴も知ってるでしょ。もし約束を破ったら、一生美貴のことを許さないかもよ」

「だから約束になるんでしょう。わたしだって生涯梢に恨まれたくはないもの」

美貴はすました顔でこたえた。

あたしはもうへらへらしたふりを続けられなくなっていた。あたしは美貴の顔を見つめ、それからトレイに載ったクレープに視線を落とした。図書室で見つけたカードのメッセージが、頭の中に浮かんでいた。

約束の結果が、どうなるかはわからない。それでもあたしは、美貴のことを信じたい。憶病おくびょうな心を奮い立たせ、あたしは美貴にクレープをわたそうとした。

けれどその途中で、あたしはもう少しだけ欲張りたくなってしまった。

「……あのさ、ただ持ってきて、すぐ帰っちゃうとか、そういうのはなしだからね。近場のおすすめスポットとか、おいしい店とか調べとくからさ、帰りの電車の時間まで、ちゃんとつきあってくれなきゃ嫌だからね。いまみたいに話したり、遊んだりしてくれなきゃ嫌だからね」

「ええ、もともとそのつもり。もつとも、それまでに何度も遊びにいってるだろうから、近所のおいしい店は行きつくしてるかもしれないけど。そのときは、稍の手料理を振舞ってくれればいいわ」

ほっとした拍子に涙がこぼれそうになった。転校のことを知らないまわりのみんながざわざわはじめていたけど、あたしは気にしなかった。

美貴にクレープを手渡すと、となりの班の桃ももが美貴のところに来てきた。

「美貴ちゃん、わたしにも半分ちょうだい」

もちろん、と美貴がうなずいた。それから美貴が朋華ともかと沢さわちゃんを呼ぶと、ふたりとも（4）飛んできた。あたしたちの話が聞こえていたのか、普段は給食中の出歩きを注意する辻井先生つじいも、いまは黙って見逃してくれていた。

美貴が約束の説明をして、四つに分けたクレープをみんなに配った。それから四人はあたしのほうに向きなおり、同時にあたしのクレープを口にした。誓Eいの儀式のように、厳かに。

それを見たあたしは、自然と二年後の光景を思い浮かべていた。その想像の中で、あたしはいまと同じように、美貴たちと仲よくおしゃべりをして、とっておきの手料理をみんなにごちそうしていた。

あたしは涙をこらえておどけた。

「いやあ、二年後がいまから楽しみだなあ。卒業メニューのクレープ、いっぺんに四つも食べられるなんて」

「えっ、もらったのは四分の一だから、持っていくのも四分の一でいいんじゃないの？」

朋華がわざとらしく慌あわててみせるので、あたしは無理やりつくったいかめしい顔くまで釘を刺した。

「利息よ利息、二年分の利息。ちゃんと一個ずつ持ってこなかったら承知しないからね」

四人がいっせいに笑いだした。涙で視界がぼやけるのを感じながら、あたしもみんなといっしょに声をあげて笑った。

【如月かずさ『給食アンサンブル』より】

問一 —— 線A「あのメッセージカードのような約束」とありますが、約束の内容はどのようなものですか。文中の言葉を使って、説明しなさい。

問二 (1) ～ (4) にあてはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度しか使えません。

ア かすかな イ すぐに ウ わざと エ のろのろと オ ひそかに

問三 —— 線B「なにかを察した」とありますが、美貴が察した梢の気持ちを文中より十一字で抜き出して答えなさい。

問四 —— 線C「美貴はなにをくれるわけ？」とありますが、美貴の答えは何でしたか。文中より十八字で抜き出して答えなさい。

問五 には体に関する言葉が入ります。漢字一字で答えなさい。

問六 ——— 線D 「もう少しだけ欲張りたくなってしまった」とありますが、なぜ欲張ったと考えますか。もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 約束を守ってもらいたいために約束の追加をして困らせたかったから。
- イ 何度も会いたいために、多くの約束をこぎつけたかったから。
- ウ 守れないような約束をしても受け入れてもらえるかを試したかったから。
- エ 多くの約束に対する答えをもらって安心感を得たかったから。

問七 ——— 線E 「誓^{ちか}いの儀式のように、厳かに」クレープを食べた時の四人の気持ちを想像して答えなさい。

問八 あなたは「約束」とはどのようなものだと考えますか。八十から百字で書きなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

話は変わるけれども、昔の儒学では「天を敬する」ということが一番重んじられた。「天」は神さまのことだと言ってもいい。最も深い意味での「自然」のことだと言ってもいい。身ひとつで独学する心は、おのずと「天」に通じている。「天」が助けなくてはならない、独学は□を結ばない。

人は自然に逆らっては何もできない。大工の高橋さんにしても、すべては生きた木との相談ずくでしか仕事はできない。木の中に入りこみ、木に協力してもらうのだ。これは学問でも同じである。対象への愛情がないところに学問というものは育たないと思ふ。対象を愛する気持ちは、結局は「天を敬する」気持ちから来る。神さまに従うように自然のありように慎重に従う。

このことを、二宮尊徳は「水車」の喩え話^{たと}でともうまく語っている。水車は水の流れに沿って回っている。それが回るのは、半分は水が落ちる力によるが、あとの半分は水を押し上げて上つて来る水車の働きによる。人が自然の助力を得るのは、こんなふうにしてである。

西洋の近代とは、自然を科学の力でねじ伏せようとしてきた時代ではないか。むろん、そんなことはできないのだが、できる気になってしまっている。

科学は、あらゆるものを数の関係に置き換えて、（物に有用に働きかける）ことを目的にしている。（1）、自分の都合に合わせて、自然を利用するわけだ。（2）、物にも自然にも、おのずと愛情や敬意を持たなくなる。口では持っているようなことも言うが、物とつき合う体も技も欠いているのだから、愛情は育ちようがない。

建築もそうで、工業生産品を組み立ててつくる建物は、全部数学的な関係をあてはめて考えられたものだ。それを考える人を建築士というのだが、建築士は図面を引くだけで、木にも石にもじかに触れるということがない。触れたって、そこから何かを掴む技を持っていない。何でも数のうえの計算で済ませる。この計算がどんなに高いビルをどれほど建てたかはだれでも知っている。（3）、そういうやり方に、人間が自然の中で、言い換えると天のもとで生きる知恵というものがあるだろうか。これがないと人類は大変なことになってしまう。

これは、高橋さんに聞いた話だが、大工と建築士の間では、柱一本立てるのにもたびたび意見が食い違う。知識と計算で物事を

考える人と、身ひとつの勘と技で仕事をする人とはそうなるだろう。(4)、高橋さんはこんなことも言う。「仕事にはできることとできねえことがある。素人はそこんところがわからねえから困るんだ」と。できないことがあるのは、自然が与える物の性質に従っているからである。もし、できないことがなくなったら、仕事は成り立たなくなる。水のないプールでは泳げないようなものだ。建築士はそうは考えない。できないことは、そのうち科学技術の進歩で可能になる、できないことを放っておくのは恥だと思っている。私たち素人もだいたいそういう考えでいる。これじゃ、人間に大事なことが、何もわからなくなるのではないか。

学問でもほんとうは同じである。考えられないことがあるということは、学問が可能になるための大切な条件である。我が身を離れた空想はいくらでもできる。が、それは空想でしかない。学問はしっかりとした対象を持たなくてはならない。その対象の性質にうまく、深く入り込まなくてはならない。身ひとつ、心ひとつで入り込む。その中でできることがどんなにわずかなことか、ほんとうの学問で苦労した人は、皆知っている。社会に出て担う仕事も、多くはそうなのではないだろうか。ただ、科学技術の発達に目を奪われて、たくさんの人がこのごくあたりまえのことを忘れていようように思う。

私は大学で教員をやっているが、まず新入生に言うことは、教員の知識に振り回されるなということである。教員は専門的な知識をたくさん持っている。そればかりやっているのだから、当然である。そしてそういうものは、すぐに古くなる。君たちが教員から学ぶべきなのは専門知識ではなく、彼らがものを考えるときに身ぶりや型なのだ。そこにその人のほんとうの力が現れている。もし、君たちが「ちよつといいな」と思う先生に出会うとする。そこで君たちが惹かれていて、そういう身ぶりや型だ。それは先生自身はつきり取り出して教えられるもんじゃやない。学ぶ側の人が、見抜いて型を盗む。それしかできない。やっぱり独学になる。

大工の高橋さんも、親方からそういう型を盗んだ。盗ませる以外に教える方法がないことを、親方もよく知っていた。だから、十代の高橋さんは成長できた。勉強でもそれは同じで、目標とする人が学問に身ひとつで取り組み考えるときに型を見て、それ自分でもやってみるといい。いやでも、それは自分だけのものになる。体と同じで、人の心の性質はみな違うから。またそんなふうに身につけた型は、古くならない。使うたびに、深くなり、いきいきとし、自分を新しくしていく。

もう一つ、私が新入生に勧めることは、大学生の間に、自分が生涯愛読して悔いのない古典に出会えということだ。それは一冊でもいい。私は大学生のある日、フランスのアンリ・ベルクソンという哲学者が書いた「心と体」という短いエッセイに出くわ

した。それはほんとうにばったりと出くわしたのである。JR中野駅から東京駅に行く電車の中で、偶然それを読みはじめた。数ページ読んだところから世界が消えてしまった。時間にして二〇分ほど。とても読みとおせる量じゃない。でも読んでしまった。ペー지를めくった記憶などない。それから今日まで、ベルクソンの全集は読んで、読んで、(X)本になっている。この人の本を読むことは、私の最大の幸福であり、生きがいである。君たちも、そういう本に出会ったらいい。古典の愛読は、君たちめいめいの気質をかけてなされる一生の事業だと言ってもいいくらいだ。

最後にこういう話をしよう。孔子の教えを記録した『論語』には、こんな話がある。あるとき、弟子が孔子に「君子の持つべき心境とは、どのようなものでしょうか」と尋ねた。君子というのは、智慧ちえのある正々堂々とした人のことだ。これに対して孔子は言った。「君子は憂うれえず懼おそれず」であると。弟子には意外な答えだった。そんな人、ばかじゃないかと思ったのだろう。一体どうしてですかと、もう一度訊くと、孔子は「身に省みて恥じることなくば、何をか憂うれえん、何をか懼おそれん」と言った。

いい言葉じゃないか。人間はこれでいいのだ。恥じるのは、身ひとつの自分の力を偽いつわっているからだろう。わかりもしないことを、わかったように見せかけたりして。するといろんなことが心配で、怖くてたまらなくなる。そこでまた嘘うそをつく。「身を省みる」とは、身ひとつの自分にいつも誠実に素直に帰ってみるということだろう。だから、君子の学問は、いつも独学なのである。

【前田英樹「独学する心」『何のために「学ぶ」のか』より】

*問題作成に当たり、本文を一部改変しました。

問一 に入る漢字一字を答えなさい。

問二 (1) (4) にあてはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度しか使えません。

- ア だから イ それから ウ でも エ つまり

問三 —— 線A「物にも自然にも、おのずと愛情や敬意を持たなくなる」とありますが、このことからなくなってしまふのではないかと考えられるものは何ですか。文中より十字で抜き出して答えなさい。

問四 —— 線B「もし、できないことがなくなったら、仕事は成り立たなくなる」とありますが、これはどういうことですか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 仕事とは自然の性質に従って、できないことを理解した上で、できるようにしていくものだということ。
- イ 仕事とは対象の性質に入り込み、できないことを理解した上で、できることを行なっていくものだということ。
- ウ 仕事とは知識と計算で図面を引き、すべてを理解した上で、不可能を可能にしていくものだということ。
- エ 仕事とは科学技術の進歩により、多くのことを理解した上で、できないことをなくしていくものだということ。

問五 —— 線C「教員の知識に振り回されるな」とありますが、これはどういうことを言っているのですか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 教員の知識は常に最新のものであり、そこにこそ価値があるということ。
- イ 教員は専門的な知識ばかりを持ち、視野が狭くなっているということ。
- ウ 教員から学ぶべきなのは考える型なので、知識は重要ではないということ。
- エ 教員に教えてもらおうとするよりも、自分から学ぶ姿勢が大切だということ。

問六 —— 線D「大工の高橋さんも、親方からそういう型を盗んだ」とありますが、その結果高橋さんはどうなりましたか。二十字以内で説明しなさい。

問七 (X)に入る語句としてもっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 読み飽きてしまった
- イ 完全に理解できない
- ウ 読み終わることのない
- エ 私の気質に合わない

問八 ———線E「君子は憂^{うれ}えず懼^{おそ}れず」とありますが、どうすることからこの心境に至ることができるのですか。文中より三十字以内で抜き出して最初と最後の五字を答えなさい。

